

出雲地区

保護司会だより

第18号

更生保護行政における 犯罪被害者施策について

松江保護観察所
被害者担当保護司

別所 みさ子



更生保護
における犯罪
被害者等施策
は、平成十九
年十二月一日
に施行されま

した。私と、同じ松江保護区の高木茂保護司が「被害者担当保護司」に指名され、毎日交代で保護観察所の被害者担当官の補助をしています。被害者等施策は次の四つで、いずれも被害者等の希望が出発点になります。

一「意見等聴取制度」

これは仮釈放等審理を一層適正化することを目的とし、仮釈放等を審理する地方更生保護委員会に、被害者等が加害者の仮釈放等に関する意見や被害に関する心情を述べる事ができるものです。地方更生保護委員会には、聴取した意見等について、仮釈放を許すか否かの判断等に当たって考慮するほか、仮釈放等を許す場合の特別遵守事項の設定等に当たっても考慮します。

二「心情等伝達制度」

被害者の、その心情等を加害者に伝えたいという思いにこたえらると

もに、心情等を伝えることによって、保護観察中の加害者に反省や悔悟の情を深めさせることにも効果があると考えられています。

三「被害者等通知制度」

保護観察所においては、保護観察中の加害者はどのような約束を守らなければならないのか、また、担当保護司や主任官とどの程度接触しているのかについて、六か月毎に被害者に書面でお知らせします。

四「相談・支援」

犯罪被害者等からの相談等にに応じて、その悩み、不安等を聴取し、その軽減を図ったり、内容に応じて関係機関を紹介したり、支援に関する制度の説明を行います。

以上四つの施策がありますが、実際の被害者との接触場面を少しお話ししたいと思います。

保護観察所には被害者専用の電話が置かれています。被害者との接触はこの電話で始まるのが大半です。ただ電話では、電話をかけてきている人が本当に被害者であるのか確認できませんので、個人情報保護の観点から個別の話はできず、制度の

説明が主になりますが、多いのは被害弁償の実行を強く加害者に求める内容です。堰を切ったように不満を述べる被害者等の話を聴き、心情等伝達を希望されれば来所を求めるところになります。

『あの人(加害者)は裁判では「被害弁償を必ず、僅かずつでも必ずします。」と述べながら、保護観察の付いた執行猶予の判決を受けてからは、被害弁償どころか全く連絡もありません。それでも刑務所に行かないで済むのですか。』という被害者の声を聞き取り、主任官を通じて保護観察中の加害者に伝え、被害者等が希望すれば被害者の思いを聞いた加害者の様子や発言内容をお知らせすることもあります。

しかし、被害者が納得することは少なく「被害者のために何をしてもらえるのですか。」と言われると、話を聴く私達も胸が苦しくなります。また次のような被害者の不安を聴くこともあります。

「あの人(加害者)は本当に反省してまじめに保護観察を受けていますか。」加害者を担当する主任官に被害者の不安を伝え、加害者の現状を確認し、被害者に伝えることもあります。「そうですか、加害者は真面目に保護観察を受けているのですか。」と安堵した声を聞くこともあります。

被害者担当保護司として、現状の制度のもとで、被害者の方々に寄り添いながら、僅かでも心が癒えることを願って、精一杯の対応をさせていただきます。

平成24年度 「社会を明るくする運動」 標語及び作文入選作品の紹介

出雲地区保護司会では「犯罪のない明るい街づくり」「青少年の非行防止」をアピールする標語を、一般の部、小・中学生の部（出雲市青少年育成市民会議との共催）として募集しました。

標語一般の部には137点、小・中学生の部には小学生986点、中学生229点の応募がありました。

また、島根県社会を明るくする運動推進委員会が行った作文コンテストに協力し、小・中学校に参加を呼びかけたところ、小学生から183点、中学生から32点の応募がありました。

当保護司会で慎重に審査した結果、次のとおり決定しました。たくさんの応募をありがとうございました。

一般の部

最優秀賞

勇気ある

君の態度が 友救う

湖陵町 春日ノブ子

優秀賞

やり直す

気持ちによりそう 地域の輪

大津町 石橋 律子

叱るより

生かそう子供の よいところを

平田町 磯崎 又司

非行の子

なくす社会は 家庭から

神西沖町 今岡 忠輔

アイサツは

非行防止の 第一歩

大津町 矢野 勲

非行の芽

地域の絆で 摘みとろう

高岡町 成相 匠平

佳作

子が学ぶ

家庭でありたい 基礎づくり

小伊津町 土江 桂子

ためらわず

一声掛けて 手をかして

大社町 伊野木 正

読み取ろう

あの子の悩み 愛の目で

天神町 加藤 早苗

見過ごすな

いじめと遊び 紙一重

武志町 築森 寛喜

勇気もて

知らない振りが はずかしい

大社町 林 宏

もうやめて

いじめ悪口 いやがらせ

平田町 磯崎 明美

地域の輪

広げて守る こどものいのち

湖陵町 園山 京子

『非行^{ゼロ}』

神話の里の 道しるべ

天神町 高橋 弘吉

見過ごすな

街の片隅 非行の芽

湖陵町 打田 薫

あいさつは

みんなにくばる 宝物

芦渡町 有田 治夫

小学生の部

最優秀賞

やさしさも

まいごちかばごご つめんだ

国富小学校 一年 中島 隆輔

優秀賞

あいさつが

きずなをつなぐ だいっほ

大津小学校 二年 福島 叶優

いわないよ

自分が言われて いやなこと

東小学校 五年 田中 翼

優良賞

あいさつで

ひろがるえがおの 町づくり

灘分小学校 二年 渡部 翔太

わたしたち

みんながうよ そこがいい

東小学校 二年 福田 真子

見のがすな

いじめのサインは きつとある

大津小学校 二年 小村 悠人

たいせつな

はなしをきいてよ

おかあさん

高松小学校 一年 高瀬 俊輝

友達は だれもが持てる 宝物

荒木小学校 六年 妹尾 優花

とっげごう

やさしいえがおが

みまもってるよ

灘分小学校 一年 梅木 真心

明日じゃなくて

今からやろう エコ活動

莊原小学校 六年 福島 篤

あいさつは

元気な心の 宅配便

長浜小学校 四年 中尾 香達

「ありがとう」

心をつなぐ 合言葉

大津小学校 六年 松浦 琴音

悪ふざけ

それよりみんなで ほめあおう

長浜小学校 六年 澤江 千裕

中学生の部

最優秀賞

辛いなら

抱え込まずに 話してね

佐田中学校 三年 板垣 未貴

優秀賞

第一歩

いじめをとめる その勇氣

第二中学校 一年 田中 弘樹

守ろうよ

小さな命の 大きな未来

佐田中学校 三年 安喰 実桜

優良賞

ポイ捨ては

心も町も よごれるよ

第三中学校 三年 門脇 明穂

ごめんねと

言える勇氣で 笑顔が増える

多伎中学校 三年 石飛 真帆

今の自分

みんながいたらから あるんだよ

斐川東中学校 三年 石原 幹太

つらいけど

私とあなたで 半分

斐川東中学校 三年 百合本香衣

お帰りの

その一言で つながれる

湖陵中学校 三年 杉原 唯那

あいさつは

地域とつながる 第一歩

湖陵中学校 三年 春日麻由美

「がんばれ」と

君に言われて 元気出た

斐川東中学校 二年 曾田由莉奈

大丈夫?

これが僕らの 合い言葉

斐川東中学校 二年 玉木 圭祐

つくりたい

笑顔あふれる 明るい町を

第三中学校 三年 鎌田 諒平

心から

素直に言えます

「ありがとう」

多伎中学校 一年 安井菜々子

「社会を
明るく
する運動」

作文コンテスト優秀作品

ボランティアをすることの意味

出雲市立斐川西中学校 二年 野津直子

ボランティア、という言葉が聞いたら、どんなボランティアが思い浮かぶでしょうか。ボランティアには、海外へ行って活動するものもあれば、地域や学校という、自分の身の周りのボランティアもあります。

もともとボランティアなどに興味がなかった私ですが、父が東日本大震災の復興支援のボランティアをやっているのを見て、私もボランティアをするようになりました。

昨年の長期休業中から、学校周辺のボランティアに参加しています。学校では、机のネジを交換したり、机の表面にニスをぬったりしました。

でも、このボランティアは、自分から始めたわけではありません。発案した先生と、私を誘ってくれた友達がいいます。

私に加わっても、最初は三人程度だったボランティアも、同じ部活の人を誘ってみると、翌日には六人に増えていました。人数が増えた分、作業も早く終わるようになりました。

でも、その時の私は、友達と一緒に、楽しいからという理由でボランティアをしていました。

ある日、仕事から帰ってきた父に、なぜボランティアをするのかときいてみました。父のしている震災のボランティアには、父の親しい友達がいるわけ

ではありません。すると父は、「早く被災地が復興できるように、一人でも多くの人が、力を貸して、みんなで協力して、復興させないといけないから。」と答えたのです。

その頃から、ボランティアが何のためにあるのかを考えてみるようになりました。

友達と楽しむのではなく、自分の得になることを考えるのでもなく、人のために何かしたいという自分の意志を持つてするのがボランティアです。

私は、そこまでボランティアの経験があるわけではなく、私がしているボランティアは、時間さえあれば誰でもできるものかもしれません。

だけど、私のしているようなボランティアでも、人の役に立っているのだということ、春休みに知ることができました。

春休みは、冬休みよりも人数が増えて、先生方も何人がおられました。そのボランティアが終わった時に、先生方からお礼

を言われました。こんな小さなボランティアでも、感謝してくれる人がいて、人のためになっているんだということが、よくわかりました。

ボランティアをしようという人が増えた時、ボランティアが終わって、感謝の言葉をかけられた時、大きな達成感がわき、ボランティアをして良かったなという嬉しさがこみ上げてきました。ボランティアをしたことで、学校がきれいになり、過ごしやすくなりました。そして、これからも続けていきたいと思いました。人のためにボランティアをして、私と同じように、この達成感や嬉しさを感ずる人が増えていったらいいと思います。そして、最初に私を誘った友達や先生のように、今度は私が、誰かを誘ってみたいと思います。

皆さんも、ボランティアとしての大きなものでなくても、人のためにできる何か小さなことをしてみませんか。

足を痛めて考えたこと

出雲市立長浜小学校 六年 澤 江 千 裕

夏休みが始まった最初の日、柔道の試合中に足を痛めてしまいました。「これくらい大丈夫ではない。」と最初は思っていました。ところが、病院に行ってみると自分が思っていたよりひどかったみたいで、そえ木をして、さらに松葉づえをつくことになってしまいました。

このけがのため、楽しみにしていた夏休みの行事がほとんどできなくなってしまいました。一か月くらい前から練習していた水泳大会も、申し込んでいたキャンプ、その他に普段なら何でもないと思っていたことができなくなってしまうました。でもその代わりに僕はいろいろなことに気付くことができました。

ジョ体操で普段なら五分で行けるところを松葉づえで行ったら二十分かかりました。しかも手には一日で片方の手に二センチ、もう片方の手に一センチの豆ができ、片足で体重を支えるためよい方の足まで筋肉痛になりました。

また、買い物をする時に松葉づえで歩くと普段なら何気なく通り抜けられるところも、思ったより松葉づえで歩くと横幅をとり、近くを歩く人の足にぶつかりそうになりました。お店の駐車場では地面が凸凹しているのと、ぐらつとして怖い思いをしました。次からは身障者用の駐車場に車を停めさせてもらいました。

けがをして悪いことばかりではありませんでした。僕が良かったと思えたことは、普段なら考えなかった人の立場を考え

ることができたことです。足が使えないと不便で、ほとんどの場所に行くことができないと分かりました。今まで元気でいることが当然でけがをすることなんてあまりなかったもので、予定外のこと起きた人の気持ちなんて考えてもみませんでした。例えばオリンピックがありました。「メダル確実」と言われていた人が負けてしまったことがありました。調子がいいのが当たり前だと観客の人たちは期待していて、不調で思うような結果が出ないと選手は泣きながら「皆さんに応援してもらったのにすいません。」と謝っておられました。その人は生活のすべてをオリンピックのために費やしてきて、それでも思うような結果が出ず、テレビで少ししか見てない人に対しても謝っておられました。自分自身が一番悔しい気持ちだったのではないかと思いません。

柔道の試合で関節技をきめられて、それでも逃げてとても痛

いだろうに試合を続け、さらに腕を痛めてもなお勝ち進んでいる選手がおられました。すごい精神力だなと思います。とてもまねできません。こんなにまでがんばっておられるのに、競い合った結果負けた選手に対して、気持ちが弱いなどと言われたりします。そして、ものすごくがんばっておられたのに、周りの人にすいませんでしたと謝らなければならぬのはどうなのかなと思います。

僕は、もっと相手の立場を考えろというところがとても大切ではないかと感じています。体の不自由な人の立場はもちろん、様々な場所ががんばっている人の気持ちも考えていくということが僕たちの社会には必要ではないかと思えます。そうすることでお互いに気持ちを分かり合い、よりよく生きていけるのではないかと思えます。



「子どもを叱れない大人たちへ」を聞いて

第六十二回「社会を明るくする運動」の啓発講演会

保護司 園山 恵子



熱い口調で参加者に語りかける講師の桂才賀さん

平成二十四年七月十五日、第六十二回「社会を明るくする運動」の啓発講演会が開催されました。

講師には、久里浜少年院、茨城農芸学院の篤志面接委員をしておられる落語家の桂才賀さんを迎えて行われました。

桂さんは、これまで約三十年間で千回以上にも及ぶ少年院の慰問活動が続けて来られた方です。

少年院慰問のきっかけは、余暇を利用して、妻の実家のある沖縄県の「沖縄少年院」を訪れたのが始まりだそうです。

その後「北海少年院」、「久里浜少年院」を慰問に訪れたが、この三つの少年院の院長が、偶然にも同じ方であり、不思議な縁で結ばれたということでした。

昭和六十三年、久里浜少年院の院長が「ほんのわずか五、六分で少年たちの心の鎧を脱がすのは、あなたしかない」と言われ、篤志面接委員の委嘱を受けられたそうです。

「なぜ、こんなに長く慰問活動が続けて来られたか」と聞かれるが「少年院に行くのが、ただ楽しみである。一時でもよいから、少年たちに腹の底から笑ってもらい、明るい気分になって欲しいからです。」と答えていると話されました。

「今の親は、子どもを怒ることはうまいが、叱ることは下手です。怒ることと叱ることは違います。怒るというのは、自分に不都合を生じさせた相手に対し、怒りをぶつけるだけです。一方、叱ることは過ちを正してやることです。」と怒ることと叱ることの違いを明確に述べられました。

「子どもたちは、怒ると叱るの区別は知っています。怒っている人には敵意を抱き、叱ってくれる人には愛情を感じるのです。」

きちんと叱るためには、正面から子どもに向き合い、子どもの心をつかりと理解することが大切である。」と強調されました。

また、桂さんの話によると、某警

察署が、補導した少年たちに「親に対する思い」をテーマに川柳を作らせていたそうです。

それにヒントを得た市内の高校で「現代高校生気質川柳」を募集したところ、応募数二千点の中から、ダントツ一位で選ばれたのが、次の川柳だったそうです。

「たまにはヨ、叱ってみるよ大人たち」

「やはり、子どもたちの本音は、大人にきちんと叱ってほしいと望んでいるのです。」と力説されました。

少年院でも、「あの時、親が真剣に叱ってくれたら、こんな所へは来ていません。」とつらい胸の内を語ってくれた子どもがいたそうです。

「両親から十分な愛情が得られなかった子どもたちは、家庭に居場所がなく寂しい思いをしています。それでも彼らにとっては、家庭や、両親が一番大切なのです。」と少年たちの思いに共感しながら話されました。桂さんの優しい人柄が感じられました。少年たちとの共通の話題づくりのために、車やバイクの勉強をして、カーレースの国内公認審判員B級ライセンス、A級ライセンスの資格を取得されたとのことでした。少年院慰問活動にかける強い思いに心を打たれました。

落語を聞いた少年たちから感想が寄せられるそうです。その中から、「思いつきり笑ったら、心の中にたまって嫌なことが、笑いと一緒

に吹き飛んだ気がしました。」

「自分ってこんなに笑えたんだ。何年ぶりだろう。」という感想を紹介されました。落語を聞いた少年たちは、笑いと共に心の鎧を脱ぐことができたと感じています。

やがて、会場が暗くなり、さだまさしの「償い」の歌が流れました。

この歌は実話をもとにした歌で、交通事故で夫をなくした夫人のもとへ、はねた若者が仕送りを続け、七年後に、謝罪を受け入れてもらったという内容です。若者の胸中が聞く人の胸に迫ります。命の尊さと犯した罪への償いについてもうたえています。

「少年院慰問の際には、必ずこの歌を聞いてもらい、少年たちに若者の心が届くよう願っています。」と力を込めて話されました。

最後に「家庭と社会が一体となり子どもの成長を支えていくことが大人の責務です。」と結ばれました。

長い間の体験に基づいたすばらしい講演に、参加者一同惜しみない拍手を送りました。



受付にあたる保護司会員の皆さん

修 察 記 研 視 察

島根県更生保護会と 松江刑務所を訪ねて

研修視察参加者 小倉 郁子

今年には保護司会出雲支部の研修として、近隣施設の視察研修が実施されることになりました。六月二十五日、坂本支部長を先頭に会員、更生保護女性会員十九名で、島根更生保護会と松江刑務所を視察しました。

最初の訪問先の島根更生保護会までは、ちょうど一時間で到着しました。この施設については以前から知っている会員も多く、また全面改築については全員承知していることなので、建物や施設内の環境については大体想像していた通りでした。中に入ると施設というより普通の



島根更生保護会本館

家庭に近いような玄関で、上りかまちは色とりどりのスリッパが並べてありました。何人かの方々が出迎えてくださり、「あなた方がこの施設の最後の視察訪問者です。」という言葉に歓迎の気持ちが感じられました。理事長さんや施設長さんの挨拶では、この施設の概要に合わせ、この度の改築について話されました。

島根更生保護会は、もともと明治四十四年に民間有志によって創設された民間の団体です。それ以来丸一世紀にわたり、社会に復帰しても帰る場を失った人たちの立ち直りを支援する事業が継続されてきました。現在の施設は昭和四十一年に建築されたもので老朽化が進み、入寮した人の社会への再スタートを支援するには支障をきたすようになりまし

た。そこで平成二十四年度に全面改築を実施することに決定したそうです。九月には工事が始まり、来年三月には竣工の予定で、新しくなれば収容率も増えるそうです。

主任補導員の方の説明によれば、



松江刑務所

入寮した人は集団生活の中で、原則六か月の間自立更生を目指して努力し、それから社会へ再出発するそうです。しかし、ここで保護される人たちが真に更生を図るには、生活の場である地域社会の中で社会復帰ができるかどうかにかかっています。したがって地域社会の人々の温かい理解と援助がどうしても必要になり、この施設では奉仕活動や行事を通して、町内会やその他の社会の人たちとの交流を大切に活動が組まれていました。

施設を見学した後、休憩をとり、松江刑務所へ向かいました。

こちらも現在工事中で、完成までにはあと十年余りかかるそうです。総務の方の説明によれば、この収容対象者はB級で、二十歳以上の犯

罪傾向の進んでいる男子受刑者だそうです。したがって年齢も高く、刑務所に入った回数もどうしても多くなります。中には酒、薬物、暴力団等の問題を抱えている人も珍しくなく、生活すべてにおいて社会復帰のための指導が実施されているそうです。

最近、刑務所を出たばかりの人の更生が社会問題になっていきます。「事件を起こせばまた刑務所に入れると思った。」という犯罪を犯した人の言葉に、ただ啞然とした人は少なくなかったと思います。国を挙げて改善更生のための事業がなされているにもかかわらず、再犯率は毎年上昇を続けているそうです。ということは、一度犯罪を犯すと、そこから社会復帰することは容易ではない、ということになります。地域社会の中で自立更生を目指す人たちと同じ社会に生きる私たち、とくに保護司としては、身近な地域の中で共に暮らせるように支援することが、最も求められていると思います。

「地域社会の理解、援助なしには、安全、安心な社会は作れない。」といわれる更生保護の事業について、改めて考えさせられた今年の視察研修でした。

立ち直りを助ける社会のチカラ 社会貢献活動

社会貢献活動とは

保護観察中の人たちが地域社会に貢献する活動を行うことを通じて、立ち直ることを目的としています。

社会の役に立つ体験を通じて、人の役に立てるという感情や社会のルールを守る意識を育みます。

▼活動の内容

公共の場所での清掃や、福祉施設での介護補助のほか、落書き消しや除雪など、地域のニーズに応じて幅広い活動を行います。活動は継続的に行います。

▼活動に参加する人

活動に参加するのは、※保護観察中の人たちで、一定の期間に複数回参加します。



福祉施設での介護補助



※犯罪や非行をして保護観察所の保護観察をうけることとなった人で、日ごろは保護観察官や保護司の指導を受け、社会で生活しています。

▼活動における指導

保護観察官や保護司が活動に同行し、活動の初めに目標について話し合ったり、活動の終わりに振り返りをするなどの指導を行います。活動中は事故やけがのないよう安全の確保に努めます。また、民間ボランティアの方々に活動への協力をお願いすることがあります。

▼活動の効果

保護観察中の人たちは、社会の役に立つ体験や、「ありがとう」と言われる体験などを通じて、「自己有用感」や「規範意識」を得ることが出来ます。社会のチカラが、その立ち直りに大きな役割を果たすこととなります。

(法務省保護局リーフレットより)

更生保護

功労受彰者

(平成二十四年)

瑞宝双光章

長永 禅教

法務大臣表彰

勝部 治良 河瀬 康承

全国保護司連盟理事長表彰

岡田 泰明

中国地方更生保護委員会委員長表彰

高瀬 泰子 岸 篤彦

中国地方保護司連盟会長表彰

原 洋子 藤森 麗子

鈴木 二郎 土江 松子

三成 歳子 園山久美子

松江保護観察所長表彰

富岡 俊夫 石橋 敏昭

景山 大圓 安田 公臣

島根県保護司会連合会長表彰

鐘築 伸正 神田修一郎

藤田 努 横木 俊信

加納 龍雄 延本 輝典

安井 守 岡 賢治

保護司の異動

◎退任

足立 進 (高岡町)
錦織 博子 (斐川町)
(平成二十四年十一月三十日付)

◎新任

花田久美子 (上塩冶町)
山上 太全 (高岡町)
足立 真司 (斐川町)
(平成二十四年十二月一日付)

編集後記

「犯罪者の保護も必要だが、被害者の支援状況はどうか。」という声を聞きます。そこで、施策と被害者側の声を掲載しました。

今年三月「保護司制度の基盤整備に関する検討会の報告書」が発表され、地域との連携強化の必要性が示されました。

これを受け、九月五日開催の出雲市コミュニティセンター長会議に松江保護観察所古川正昭課長にお願いし、保護司の現状や役割を話していただきました。

保護司の皆様には、面接場所の確保や後任候補者探しなど、コミュニティセンターとの今後一層の連携が望まれます。(安田公臣)